7 六千人の命のビザ

一九四〇年七月十八日の朝。リトアニアの日本領事代理だった夫（杉原千畝）に言われ窓の外を見ると、建物の周りを人の群れが埋めつくしていました。日本通過のビザを求めるユダヤ人たちでした。外務省は通過ビザの発給を認めませんでしたが、夫はこの命令に背いてユダヤ人たちにビザを書き始めます。

ビザを求めるユダヤ人たち

杉原千畝・幸子夫妻

根井三郎がつないだ命のビザ

根井三郎（1902-1992）
宮崎県生まれ。1921年、外務省留学生試験に合格しハルビン学院に留学。杉原千畝の2年後輩となる。戦後は、鹿児島、名古屋の入国管理事務所所長などを務めた。（写真：根井三郎を顕彰する会提供）

日本通過のビザを持ったユダヤ人たちは、1941（昭和16）年、ソビエト連邦（現在のロシア）をシベリア鉄道で横断し、ソ連極東の地、ウラジオストクに到着します。福井県の敦賀港行きの船に乗るためでした。

しかし日本政府は、リトアニアのカウナスで杉原千畝が発給したビザは不備が多いので、日本に行くことを許可しないよう命じました。当時ウラジオストク総領事代理だった根井三郎は、悩んだ末に、一度許可したものを取り消すのは日本の権威を損なう、として「面白からず（良くない）」と強い言葉で反発。ビザを持っていなかったユダヤ人には独断でビザを発給し、敦賀港行きの船に乗せたのでした。

こうして、杉原千畝の命のビザは根井三郎によってつながり、大勢のユダヤ人が日本に、さらに世界各地に向かうことができたのです。